

「安心」と「自由」を調和するレシピ～『何もなくて豊かな島』

フィリピン、カオハガン島のコミュニティ開発

小早川 裕子 国際教育センター 副センター長・准教授

1. はじめに

(1) 研究の背景

世界中の人々の流動と接触を止めた 2020 年は、私たちに「幸せ」について改めて考えさせられる年になった。イングランドには古くから『王様と粉挽き』の話しが伝えられている¹。身分がら毎日働いても経済的に豊かではないが「幸せだ」と言う粉挽きと、働かなくても経済的に満たされているが心は満たされない王がいる。「なぜ？」と問う王は、粉挽きにあって自分にはないものを知る。幸せを分かち合う仲間の存在である。経済的な豊かさだけでは必ずしも幸せで満たされる事はないと言うメッセージである。

工業化によるボタン一つで仕事や家事の事が済むオートメーションの世の中は、私たちを労働から解放し、生活を楽しみにしてくれた。そして技術の革新とグローバル化は、一層速いスピードで私たちの日常に変化を来たすようになった。しかし、時間的労働的束縛からの解放で私たちが確実に犠牲にしてきた代償がある。その犠牲とは『王様と粉挽き』にみる「仲間（コミュニティ）」の存在である。時間的労働的束縛からの解放を得るために、コミュニケーションの時間を失った家族やコミュニティとの絆の希薄化は、「個人化」として論じられている（Delanty 2007, Beck 1986, Bauman 2001&2008, Putnam 2000, Burt 2002, Bowles 1999）。

社会学者のジグムント・バウマンは、「コミュニティを失うことは安心を失うことを意味し、コミュニティを得ることは自由を失うことを意味する」と論じている。「安心」と「自由」を調和する「レシピ（製造法）」は未だかつて考案されたことがないが、問題は既存のコミュニティのレシピでは「安心と自由の間の矛盾が目に残るほど大きくなって、修復が難しくなる」と説明する。さらにこうした問題への最良のレシピは、同じ失敗の繰り返しを避けることができる「過去の経験からの学び」であるとしながらも、安全と自由を同時に、十分に満足できるだけ手に入れることもできない。最も確かなことは、「完

¹ 1 “A Miller and a King” ‘I am a miller. I go to the mill by the river. I work there every day. I am not rich. But I am happy. I am a king. I do not work. I am rich. I can do anything. But I am not happy. I am sad. Why? MILLER: Look at the people over there. They’re singing. They’re dancing. They’re all my friends. KING: Miller, let’s change places. MILLER: No, thank you. I’m happy now. KING: Really? MILLER: Yes. I have many friends. They’re kind to me. Do you have any friends? KING: No. I don’t have any. MILLER: Come and join us. KING: ...’

全は善と改善双方の不倶戴天の敵だと言うことである」と論じている (Bauman 2008)。

本稿では「安心」と「自由」を調和する「レシピ」を生み出した『何もなくて豊かな島』として知られるフィリピン、カオハガン島のコロナ禍で閉鎖されるまでのコミュニティ開発過程をまとめ、豊かで幸せなコミュニティについて考察する。

(2) 研究地域

本研究の調査地域であるカオハガン島は、フィリピンのセブ島沖 10 キロ離れたオランゴ環礁に位置し、その面積は約 5 万平方メートルである。現在およそ 700 人がこの島で生活している。縁があり日本人の崎山克彦が 1987 年にカオハガン島を購入した。フィリピンでは外国人が土地を所有する事は認められないため、崎山はフィリピン人のパートナーと一緒に島の所有会社、フィリピン法人「Caohagan Inc.」を立ち上げた（パートナー 60% 所有、崎山 40% 所有）。1991 年に移住して以来、崎山はカオハガン島の発展に携わり、1992 年に島を管理する目的で、「Caohagan Island Club Inc. (CICI)」を設立している。

(3) 調査方法

主な調査方法は、定性調査、参与観察、資料収集による。定性調査、並びに参与観察は、2019 年 3 月、8 月、2020 年 3 月に行った。カオハガン島の現状を中心に、島社会と島民関係の変容に関する聞き取り調査は、崎山、セブ市とカオハガン島に住む CICI メンバーとカオハガン島の村長を対象に実施した。資料収集は、崎山が執筆したカオハガン島に関する書籍ⁱの他、カオハガン島に関する論文ⁱⁱやウェブサイトⁱⁱⁱから行った。

2. カオハガン島の伝統生活と変遷

(1) カオハガン島の伝統生活（～1990 年）



写真 1：2020 年 3 月筆者撮影

カオハガン島はおおよそ東京ドームのサイズで、どこへ行くにも車は勿論のこと、自転車すらも必要としないココヤシがこんもり生える小さな島である（写真 1）。砂地であることから、裸足で歩くのが気持ちがよい。潮が引くと遠浅になり、隣の島まで歩いて行ける。

砂地で野菜や植物が育ちにくいカオハガン島は、長年漁師たちの中継地点として利用されるにとどまっていたが、人が住み着くようになったのは 150 年ほど前とされている（杉浦 2013）。それでも 30 年前（1990 年代）までには人口は 350 人までに増えた。

カオハガン島は、正に「自然と共に生きる」生活が培われ、それが文化となっている。

手付かずの自然から得られる恵みに感謝し、互いに分かち合う暮らしで住宅、漁船、漁の仕掛けなど全てが協働のもと造られてきた。この島では「労働」は生活をするための営みであり、稼ぐための仕事ではない。労働するかしないかの選択は、島民の自由意志である。彼らは漁で生計を立てているが、食糧が十分あれば漁には出ない。また、魚貝類を保存する術がないため、乱獲はせず余った分は近所にお裾分けするのが日常であった。島民は早朝に作業を終え、日差しの強い日中は、大人も子供も木陰で昼寝をするか、集まって雑談する。午後は必要があれば、船の修繕や網を作るなどするが、仕事をする必要がなければ「トゥバ」と呼ばれるココヤシから作られた酒などを仲間と一緒に飲みながら楽しく時を過ごす。カオハガン島では労働によるストレスはほとんどなく、男女問わず、とにかく毎日よく笑っておしゃべりをする。そのため互いの信頼関係が深く根付いており、笑顔の絶えない平和な暮らしをしてきた。島で生産されない米や日用品などは、近隣の島で週1回開かれる市場で、物々交換をして得てきた。30年前まではほとんど現金を必要としない暮らしだった。

子供達は大人を見様見真似して育つ。自分の子供達と分け隔てなく島の子供達を育てる。前述したように、労働は生活するために必要な仕事であり、子供達も家や船を作る時は、当たり前のように手伝った。そのため子供達が14-15歳になる頃には、島で生きるために必要なノウハウを身につけた。そうして若者になった彼らは、近隣の大きな島やセブ市へと仕事を求めてカオハガン島を出ていく。この循環で島の人口は一定に保たれてきた。

このように、カオハガンには互いを信頼し恵みを共有する「自然と共にある暮らし」＝「カオハガン文化」が価値観として根付いていた。安心して生活できるコミュニティが存在し、そのコミュニティは島民の自由を束縛する事なく、極めて平和なものだった。

（2）島の所有者の登場とコミュニティ開発（1991年—2015年）

カオハガン島の島民は公的な居住認可を得ていない。従って、島民は法的には不法占拠者となる。そのため外国人が島を買おうと島民が追い出されるケースが多い。しかし、崎山は島民の豊かなカオハガン文化に共感し、共に生きる事を選択した。崎山が目指す島の暮らしの根幹には、カオハガンの自然環境と島民の生活環境を保ち、それを一層良いものにして持続させたいという思いがある^{iv}。

カオハガン島の経済は、2010年に崎山が行った調査によると、漁などから得る島民1世帯（7～8人家族）あたりの月収は約9,000円だった。これを世界貧困指標に照らし合わせると、島民は最貧困層に匹敵する。とは言え、島民の暮らしは幸せで豊かだった。それはカオハガン文化があるからだと言明する。ここでの「豊かさ」とは、経済力があり欲しいモノを入手できることを意味するのではなく、「心が満たされている」と

言う理解である。それでも時の経過と共に、島にも様々な情報がもたらされるようになり、島民にも欲しいモノが出てくるようになった。そこで、島民の暮らしに合わせた現金収入の取得方法を考えた崎山が最初に手掛けたのは、宿泊施設であるカオハガン・ハウス建設とキルト作りであった。その他、水やトイレなどのインフラ整備、教育、ヘルスセンター設立、珊瑚保護区の創設などに着手し、不足していたカオハガン島の基本的ニーズを補充していった。

島民はカオハガン・ハウスの従業員としての業務やキルト作りなどから現金収入を得るようになった。また、高等教育を受ける者も増え、インフラ整備で衛生的に暮らせるようになっていった。病気になった時も保険で病院に行けるようになり、病気や健康面の不安はなくなった。崎山によるコミュニティ開発は、自然環境と生活環境を改善しつつ、カオハガン文化を維持することを目的としている。それを実現するために崎山が開発プロセスで最も重視しているのは、村長との意思の疎通である。村長と話し合いを日々重ね、島の諸課題に取り組んできた。崎山はまた、島民との触れ合いも欠かさない。夕方散歩して砂浜まで行くと、沈みゆく日を浴びながら軽い体操と瞑想をした後は、帰り道に行き交う島民に声をかけ、民家を訪れる。そこで崎山は、島民達と一緒にラムコーラを数杯嗜みながら、その日の彼らの様子や考えていることに耳を傾ける。そんな島民と触れ合う日課を 30 年間続けながら、島に必要な設備を整えてきた崎山に対する島民の信頼、感謝、尊敬は深い。しかし、グローバル経済の波はカオハガン島にも押し寄せ、年々大きくなっていった。その結果、カオハガン文化維持の危機が到来した。

（３）グローバル経済の参入とカオハガン文化の危機（2016-2019 年）

アイランドホッピング^vはフィリピンを訪れる観光客に人気がある。セブ島がリゾートアイランドとして世界的に知られるようになると、アイランドホッピングでカオハガン島を日帰りで訪れる観光客が増えた。日帰り観光客から得られる収益は、2010 年頃まではそれなりに充実していたが、カオハガン島が提供するロブスター、シャコ、蟹、アワビと言った高級魚貝類が人気を得て、2015 年頃から大量の中国人観光客が押し寄せるようになった。毎日やって来る 250-300 人もの、これまでとは桁外れな数の観光客がもたらした島への影響は多大だ。魚貝類の販売で、時には一人一日 9,000 ペソ（約 20,000 円：2019 年現在）になる事も珍しくない（CICI メンバー）。セブ市で大卒の平均的な初任給は、月 12,000 ペソ（約 25,000 円）である。島民が観光業を通して、どれだけ富を得ているか想像できよう。資本主義原理で島民はより一層利益を得ようとして競い合い、喧騒的で見苦しい客引きの光景が目立つようになっていった（写真 2）。

グローバル経済の参入で島民は互いに分かち合いたくないモノを持つようになった。すると開放的だった民家の周りは、塀で囲まれていった（写真 4）。カオハガン文化の崩

壊の始まりである。さらにカオハガン島に魚貝類を持っていくと売れると、周辺の島々から魚貝類を売りに来るようになった。すると島民は漁に出なくなった。島の教育も、崎山のコミュニティ開発の一環で、それまで小学2年生までしか受けられなかったのが、小学校6年生まで島内で受けられるようになると、セブ島本土などでさらなる高等教育を受ける者が出てきた。「教育を受けた」彼らは、漁を無学の者がする汚い仕事として考えるようになり、漁には手を出さなくなっていった。そのような過程で、世代間の信頼や尊敬も次第に薄れていった。泡銭を得続け、島民のこれまでの価値観が変わっていく中で、経済格差の拡大は島民間に嫉妬や妬みといった感情を生み出し、人間関係に亀裂が生じるようになっていった。

（４）「安心」か「自由」かの選択（2019—2020年）

カオハガン島を運営しているのが島の所有者である崎山だが、島民の意見を聞き束ねているのは村長である。カオハガン島に移り住んで30年が経つ崎山は、現村長の父で元村長の時代から強い信頼と友情を構築しており、その友好関係は現在まで引き継がれている。カオハガン島の平和と安全は、この二人によって守られており、その事を島民はよく理解している。観光客の客引きで喧嘩合いが多発する状況と拡大する経済格差が醸し出す、島民間の不和によるカオハガン文化の消滅とカオハガン島自体の崩壊の可能性について、崎山と村長は共通した危機感を持っていた。二人は話し合いを重ね、その改善策として、最終的に観光業の協同組合による運営を島民に提案する事にした。この提案に対し、島民は異論する事なく受け入れ、2019年の7月に結成した。2020年3月に村長から聞いた話では、協同組合にはおよそ70人が所属し、彼らの所得は15日間働いて、一人約15,000ペソ（約30,000円）とのことだ。個人運営していた頃は、時として1日9,000ペソ（約18,000円）も稼ぐ者がいた中、15日間の収益が15,000ペソとなれば大幅な減収である。不利益をもたらす協同組合の結成をなぜ島民は合意したのだろうか



写真2：2019年3月観光客で賑わうマーケット



写真3：2020年3月観光客が消えたマーケット



写真4：2019年8月フェンスに囲まれた民家（筆者撮影）

か。村長は「島民を説得する特別なマジックはなく、自然からの恵と豊かさを分かち合う営みが、以前のような平和で安心したコミュニティを取り戻す事になると崎山と共に

島民に説明しただけだ」と話した。

3. カオハガン文化

(1) 「安心」と「自由」の間のレシピ

協同組合が結成され1ヶ月経った2019年8月のマーケットでは、島民は相変わらず大勢の観光客の対応で多忙であったが、これまでとは異なり、客引きで島民同士が争う姿は全くみられなかった。島民が「安心」を得られるコミュニティとコミュニティを得ることによる「自由」の喪失とを調和する「レシピ」を島民の意志で模索され始めたのである。彼らは現金収入を得る自由を決して失ったわけではない。簡単に手に入るようになった現金収入に対する取得方法と程度について考えるようになったのだ。島民は、『何もなくても豊かな島』において幸せに暮らすための「心の豊かさ」と「経済的な豊かさ」のバランスを取るための「レシピ」を調合し始めたのである。

これまで考察してきたように、毎日多くの観光客が訪れるようになり、経済的に潤うようになった代償は、コミュニティの不和とカオハガン文化の崩壊の危機であった。島民は漁に出なくても周辺の島々から魚貝類を売りに来るため、漁というきつい労働をしなくなった。それによって、子供達は漁を学ぶ機会を失っただけではなく、これまで15歳までに習得していた島で生活するためのあらゆる知恵や技術を身に付けることがなくなった。そしてより高い学校教育を受けるようになった子供達は、漁を見下すようになっていった。一方で、カオハガン島で教育を受けた子供達が都市部で働くには十分ではなく、また、都市生活に馴染めない場合がほとんどである。例えば、セブ市での就職先は極めて限定的で、行き着くところは、セブ市の漁港に形成されたスラム街に住み着いたカオハガン島民の一員として低賃金労働者としての暮らしに甘んじるか、島に帰って仕事がないままその日暮しをするかである。

コミュニティの不和は、島民の住宅事情にも影響を与えていった。それまで開放的だった民家は、島民同志共有できないモノが増えると彼らの心に変化が起こり、それは塀で囲まれた家という形で目に見えるようになり、カオハガン文化に陰を落としていった。しかし、1990年代までほとんど現金を持たずに物々交換で成り立つ生活を島民は覚えている。そしてその時、島がどれだけ平和だったのかも経験として残っている。グローバル経済は「何もない島」に経済的物的豊かさをもたらせた。しかし、その経済的物的豊かさは、彼らが経験してきた互いを信頼し、自然の恵みを分かち合って平和に暮らす豊かさを満たす事はなかった。村長と崎山が提案した協同組合による観光業経営が、以前の平和と心の豊かさをもたらすレシピであると島民は納得したのである。

(2) コロナ禍のカオハガン島

COVID-19 の拡散で 2020 年 1 月 29 日から中国人観光客がカオハガン島から消えた（写真 3）。2020 年 3 月 1 日から 3 日の 3 日間で行った第 3 回の調査では、泡銭で踊らされていた島には平和と静けさが戻り、時間の流れさえゆったりしているように感じた。大きな財源を失ったにもかかわらず、島民の生活は不思議なほど穏やかだった。男達は若者を連れ立って漁に戻り、捕った魚を島民間で分かち合っていた。カオハガンの豊かな暮らしの文化は、島に自然との調和の中に安定をもたらし、島民間の信頼、尊敬、友情を取り戻させていた。シンプルな暮らしは心身共に健康な社会を形成する。カオハガン文化の維持こそが、「安全」と「自由」を調和するレシピなのである。その事を悟った島民は今後観光客を迎える日が来ても、心と経済の豊かさのバランスを取りながら、カオハガン文化を維持していくだろう。そして、稼ぐために働き続け疲れた人々に「心豊か」に生活する世界観を見せ続けていくであろう。

【脚注】

- ⁱ 崎山克彦、1995、『何もなくて豊かな島』、新潮文庫
- 崎山克彦、2001、『世界でいちばん住みたい島』、PHP エディターズグループ
- 崎山克彦、2002、『ゆっくり生きる』、新潮社
- 崎山克彦、2004、『カオハガンからの贈りもの』、海竜社
- ⁱⁱ 杉浦祐子、2013、『学び合う観光：フィリピン・カオハガン島が投げかける「豊かさ」への問い』、京都大学農学部食糧・環境経済学科、農学原論分野専攻、卒業論文
- ⁱⁱⁱ カオハガン島公式ウェブサイト、「崎山克彦のプロフィール」より（<https://caohagan.com/page-30/>）
- ^{iv} カオハガン島公式ウェブサイト、「崎山克彦のプロフィール」より（<https://caohagan.com/page-30/>）
- ^v 点在する島々を巡る日帰り観光。スノーケリング、島料理、お土産品などを楽しむ。

【参考文献】

- 恩田守雄、2006、『開発社会学：理論と実践』、ミネルヴァ書房
- 崎山克彦、1995、『何もなくて豊かな島』、新潮文庫；2001、『世界でいちばん住みたい島』、PHP エディターズグループ；2002、『ゆっくり生きる』、新潮社；2004、『カオハガンからの贈りもの』、海竜社
- 佐藤寛、2003、『参加型開発の再検討』、アジア経済研究所；2004、『援助と住民組織化』、アジア経済研究所；2005、『援助とエンパワーメント』、アジア経済研究所；2007、『テキスト社会開発』、日本評論社
- 杉浦祐子、2013、『学び合う観光：フィリピン・カオハガン島が投げかける「豊かさ」への問い』、京都大学農学部食糧・環境経済学科、農学原論分野専攻、卒業論文
- アマルティア・セン、2009、『グローバリゼーションと人間の安全保障』、日本経団連出版；2016、『不平等の経済学』、東洋経済新報社
- アマルティア・セン、池本幸生、野上裕生、2018、『不平等の再検討—潜在能力と自由』、岩波書店
- A.V.バナジー&E.デュフロ、2012、『貧乏人の経済学：もう一度貧困問題を根っこから考える』、みすず書房
- Bauman, Z. 2001、『リキッド・モダニティ液状化する社会』、大月書店
- Bauman, Z. 2008、『コミュニティ、安全と自由の戦場』、筑摩書房
- Bauman, Z. 2008、『個人化社会』、青弓社
- Beck, U. 1986、『危険社会』、法政大学出版
- Bhalla, A., Lapeyre, F. 2006、『グローバル化と社会的排除』、昭和堂
- Bowles, S. 1999, “Social Capital and Community Governance”, Focus
- Burt, R. 2002, “Structural Holes versus Network Closure as Social Capital”, in Nan Lin, Karen Cook & Ronald Burt (eds.) Social Capital Theory and Research, Aldine de Gruyter
- Delanty, G. 2007、『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』、NTT 出版
- ジョン・フリードマン、2002、『市民・政府・NGO：力の剥奪からエンパワーメントへ』、新評論
- ポール・スピッカー、2008、『貧困の概念— 理解と応答のために』、生活書院
- ロバート&エドワード・スキデルスキー、2014、『じゅうぶん豊かで、貧しい社会』、筑摩書房社
- Putnam, R. 2000, “Bowling Alone”, Simon & Schuster Paperbacks